みらくる×ぷれしゃすメモリーズ

～大切な思い出～

山林檎

序話

雨のにおい。雲も灰色に染まり始めた。腹も減った。最後に食べたのは3日前。名のしらぬ実を食べ死にかけた。なぜそのまま死ぬことができなかったのか。

雨がふりだした。そういや昨日近くを通った人のスマホから天気予報が流れていたな。

五歳の誕生日前。父と母は所謂(いわゆる)汚れ仕事をしていた。父と母をうらむ奴らが私へのプレゼントを買っている間に拳銃二発。

当時はよくわからず、父と母からの最後のプレゼントのぬいぐるみをもって孤児院へ入った。私は白い髪に紅い目をしているため、毎日いじめにあっていた。それにさすがに嫌気がさして、最初にいじめてきたやつをおした。おしただけだった。その子は即死。

先生達も自分を「悪魔」というようになった。

孤子児に入って三年。8歳の時、ついにおい出された。何ももたせずに。

それから一年。今に至る。死ねば父と母にも会えるのだろうか。モテたかったなぁ。

一話

ここはどこだ？生まれかわれたのか？

ってかここどこ？キラキラしてる…街!!鏡、鏡!!

（白い髪、紅い目、かわらないな…この体、十六くらいだろうか…）
名も年も分からない。年は十六として名はどうするか…　ドスンッ
「いってぇなぁぁ!!どこみて歩いてんねん」
（んんん？この声、姿でそれ？）
そこにいたのは十七くらいのＴｈｅ・美という声と姿の女性。緑の髪に赤いキレイな花を一つのせている。
（キレイだなぁ）
「オイ!!きいているのか。名は？年は？」
「ええと…華　林檎で十六だと思います」
「？」
何かやってしまったか…名前、無理矢理すぎたか？
「うそが下手だな。能力は？」
（ノウリョク？ってかバレた!?もうよくわからん。よし、にげよ）
「すみませんでしたぁ～!!」
足を動かした。何度も、何度も。何故うごかない？
「ふはははは。君はバカだ。私から逃げようとするなんてバカが。バレバレのうそをつくのも

バカだ。能力も知らないなんてバカだ。」
「何なんですか。バカバカと」
「アタシは緑川（みどりかわ）　幻（まほろ）。能力は花だ。」
「花？」
「花を自由自在にうごかせるのだ。今、うごけなかったろ？それは小さな花弁を糸のようにして、君にぶつかった時にくっつけたのだ」
「何故そんなことを…」
「だぁってぇー…素質を感じたのと、事情がありそうだったのとぉー…おもしろそうだったからぁ～」
「絶対最後のがおもな理由でしょう。」
「ソンナコトナイヨっということで、ついてこい。仕事をやろう」
「どういうことで？仕事って勝手に」
「いいのか？金もねぇんだろ？この街はうちらの会社が管理してるんだぜぇ？いいのか？」
「うう…」
　仕方なく後をついていった。
「何があったか話せ」

―かくかくしかじか―

「気持ち悪いですよね。しかも前世とか能力もってないとか…容姿も」

「なぜだ？ここの会社のほとんどは気持ち悪いやつばかりだし、その容姿、とてもキレイだと思うぞ。能力は…」

「え⁉でもやっぱりそうですよね。能力がないと」

「お前は能力なくてよさそうだなっ」

「それってどういう…」

無視ぃぃ～…幻さんはある場所へ入っていった。一面に本がならんでいる。

「図書館ですか？」

「ええそうよ。」

知らない人の声。暗闇からなにかがとんで…きてる⁉　ドスッ

「アッアブネー」

私はみごとによけた。とんできたものは分厚い本。ちょうど顔面スレスレのところにささった。

「いきなりなんですか‼」

「そう、おこるな…お前は新人に本をなげるなと何回いったらわかるんだ‼」

「すみません、社長。ですがむやみに図書館に知らない者をいれるのは…」
「仕方がないじゃないか。本部までの道なんだから…」
（しゃっ社長⁉本部⁉）
「すみません。わたくし、この図書館の管理と本部の門番のようなものをつとめています。秋本（あきもと）　文（あや）と申します。本を自由にあやつることができます。本部までの道をあけますね。」
本だなには一冊分のすき間があいていて、文さんはさっきなげた本を引きよせてすき間にさした。
ガチャンッ

2話

（やべぇ…すげぇ）
「そんなにすごいか…本部」
「えっ…。」
「顔に出てるぞ。」
「うぅ…」
（本部…これが…ってか今話してるの社長⁉不敬になってないかな？）

「だいじょーぶだとおもーよ。」
「誰ですか？」
「ぼくはねぇ、見心（みごころ）　琥珀（こはく）だよぉ。心がよめるんだぁ。人も物もねぇ。」
この人の前で隠し事はできない。多分自分にとって、一番こわい人だと確心した。
「あっでもだいじょーぶだよぉ。君はうそもかくし事もド下手だからねぇ。」
「ひどい!!」
ごほんっ
「わっ私は野茨（のいばら）　紫苑（しおん）。むむむ、無意識をあやつることができる。よっよろしく。」
（わぁ…可愛いなぁ。）
「ねねっ俺も俺も!!俺はねぇ…友鏡（とがみ）　月桂（げっけい）。物でも人でも見た物ならすべてに声から形まで完ぺきに擬態できるんだよ。」
「すっすごい!!
「そうだろう。もっとほめてくれたまえ!!」
「最後は私ですね。」
「えっちょっ、無視ぃ～？」
「私は社長の秘書を務めております。翠（みどり）　菫（すみれ）です。空気中の水をあやつる事ができます。」

「ねっねぇ…君は？」
「私ですか？えぇとぉ…」
「アタシが拾った。前世の記憶があって、苦労してきたらしい。名はなく、年れいは十六くらいだと思われる。ということで～。」
『名付け大会』
「えぇ～!!」

3話

いま私はなぜか別室にいる。名付け大会が行われているからだ。おい!!とか君でいいのになぁ…

〈別室では～〉
「椿なんてどぉ？可愛いじゃん。」
「いいやアタシは林檎がいいと思うわ。」
「彩蝶なんていいと思いますけど。」
「雀なんてどうですか？」
「あ、あの…紅葉なんてどうですか？はっ花言葉を考えると一番あの子に心要だと思うんで

す!!」

・・・・・

（まずかったか…）

「「さんせい!!」」

「え!!よっよかったぁ。」

「この名が似合う子にしてあげないとな。」

〈別室にて〉

「ただいまー!!」

「おかえりなさい…」

「お前の名はこれから紅葉(かえで)だ!!」

「いいのですか？」

「みんなできめたのだ。この名が以合う子になるのだ。そして…苗字は、アタシが拾ったから緑川でいいな!!」

「社長ぉ～ずるいですぅ～」

「いいのですか？」

「ああ。アタシ達はみな家族だ。ここは衣食住もそろっていて、家族がいる。どうだ!!アッ

トホームな会社だろう!!」
「えぇ…本当に。アットホーム以上ですね。」
緑川紅葉はまだしらない。このあとに恐怖がまっていることを…。
「この服なんかどう？」
「これもいいですね。」
「もういらないですってばぁー!!」

4話

「この会社は建全な殺し屋のような警察のような…いらいして、それに見合う対価を払ってくれれば何でもするよぉ〜っていう会社だね!!」
「へぇー…そこになぜ私が？」
「できるからだよ。紅葉には誰にも真似できないみりょくと能力があるんだよ!!」
「そうなんですかぁ。」
「君は何したい？好きな物とか。」
「う〜ん…しいていうならりんごが食べたいです。」
「そうか…なら。」

ニョキ　ニョキ
「なんだって!!社長が出したりんごの花から大量のりんごが…いいんですか？」
「いいともいいとも!!」
シャクッシャクッシャクッ
「おっおいしい♡」
「だろぉ!!フルーツはアタシにたのめ!!
「ありがとうございます。」
プルルルルル
「すまんな。電話がきたもんで少し外す。」
「はい。」

「やぁ緑川君。」
「こんにちは。どうしたんだ。」
「そちに新入りが入っただろう。こちらにゆずってほしいんだ。」
「は？なにを馬鹿なことを…」
「いたって私はまじめさ。彼女のことはよくしっているはずだ。何たってお前と彼女の両親

の相ぼう（パートナー）だろう？」
「っ!!」
「よかったよ。彼女があっちを前世だと感ちがいしてくれて。彼女が自分の能力が分からなかった事、辺りの人が隠してくれたことがよかったな。」
「何故それを…」
「彼女が亡くなったと思っている両親に問いただした。彼女も両親と一緒に能力を我々のためにつかってくれたらいいのだけどな…」
「貴様…何をした。」
「別に？忠告はしておくよ。彼女に能力の事、両親も自分も一度も死んでいない事をひみつにしておけ。彼女のためでもあるからな。」
「おい!!ちょっとまて」
　ツーツーツー
「っクソ!!」　ガタッ
なにかをけってしまった。
「大丈夫ですか!!」
「あぁ。大丈夫だ。仕事が入ったから話のつづきはまた今度でいいか？」

「はい!!」
「なら、部屋にもどり、すべてのかぎをしめて中でなにかしておいてくれ。」
「分かりました。」

「皆、あつまってくれてありがとう。とつぜんだが、ヤツから電話があった。
「ついにバレたんですね。あちらの要求は？」
「紅葉をわたせと。」
「無理な要求だねぇ。他に言っていたことは」
「紅葉の父と母をあずかっているそうだ。紅葉には悪いが救出はいらいと対価がないとできない。我々にそこまでの力はない。」
「そっそのことなんですが…あっ案があります。」

5話

「紅葉!!初仕事だ!!今回は琥珀と文と行ってもらう。」
「「はい!!」」

「場所はここね」
「心よめたら近くに人いるかも。」
・・・
「よめた。あのかどだよ。」
「りょーかい!!」
バコンッ
文は本を銃のようにあつかった。敵に同情したくなるほどひさんな姿だ。
「「紅葉!!」」
(へ?)
ドォォーン
たしかに敵はこちらに向ってきていた。あの2人も何もしていない。何がおこったのか3人は分からなかった。
「紅葉…やったよ!!つかえたよ!!」
「い、いやこれは単なる「奇跡」で…」
「そうかぁ奇跡っていう能力なんだねぇ。」

「すごい!!はやくみんなたおして、今夜は宴をしましょう。」
社長とヤツはしっている。その奇跡は本当のピンチの時に10分の1の確率でしか発生しないこと。そして、彼女の母、緑川家の長女のいでん、緑川家しかつかえない力ということを。
その後、興奮した文と琥珀によって敵はバタバタとたおされていった。

6話

〈紅葉、初能力発動を祝う会〉

「「おめでとう!!」」
「みんなありがとう。でも…」
「なんであれ1回は発動したんだからいいではないか。」
「・・・」
「社長?」
「っああ。少し夜風をあびてくるよ。」
「「はーい。」」

「どーしよーかしらねぇ。」
「大丈夫ですか？あの電話の時から様子が…」
「あぁ…紅葉か。なんでもないぞ。」
「そうですか…でも無理しないでくださいね。」
「善処するよ。」
「失礼しました。」
紅葉には申し訳ないが、少し無理させてもらう。

（本当に大丈夫なのでしょうか。）
「大丈ー夫だと思うよぉ。」
「うぇ!?琥珀さん!!心読まないでくださいよぉ～」
「だってぇーなぁんかなやんでたんだもぉ～ん…」
「そうだとしてもびっくりしますから…」
ドゥルルルルルル
（ドゥルルルル!?バイク？こんなとこに。）
「やぁやぁ。紅葉君、琥珀君。なぁ～に俺ぬきではなしてるの？」

「げっげげ月桂さん⁉さっきの音は？ってかいつからいたんですか？」
「さっきの音は社長の部屋のトビラに擬態して、擬態をといた時の音だよ‼」
「バイクみたいな音するのすごく不便‼」
「実は音かえられるんだよね‼」
「じゃあかえてください‼」

7話

（昨日、楽しかったな‼）

コンコン

「はぁ～い。どうぞ。」
「失礼します。社長から仕事をいただいております。このバイクにのってください。」
「分かりましたけど、バイクってどこから…」
「空気中の水でつくりました。さあ、早く。」
「でも準備が…」
「もうできています。さあ早く」
「えぇ‼でも…」

「早く!!」
ガツッ
「ふぇ？え、え？」
無理矢理バイクにのせられた。
「うぉっはやい!!」
「そうでしょう。これは空気中の水でつくってあるんで飛んで移動しているんですよ。」
「え？（高所恐怖症）」
「あっ紅葉ちゃんが死んじゃった。」

「…たよ。つ…まし…よ。つきましたよ!!」
「へ？あっすみませんってここは？」
「静岡駅です。」
「ここが現場なんですか？」
「いいえ。池袋駅まで電車で行きます。」
「え？バイクは？」
「空にも交通規制があって、こっちの方がいろいろいいんですよ。」

「現実的⁉」
「実は駅に出張中だった社員がいるのです。」
「そうなんですね‼」
「あっいたいた！あたい、フレン・チャイルドなの。あった物や人、出来事を想像するとなかったことにできる能力をもっているの。よろしくなの。」
「よろしくね。フレンちゃん。」
「年下あつかいすんじゃねぇなの。私は先ぱいなの。うやまえ‼」
「アッハイ。スミマセンデシタ。」
「フレンはこういう人なんです。ゆるしてあげてください。」
「はい。」
ガタンゴトン
「遠いいんですね」
「はい。二時間ほどかかるそうです。」
「ここって飲食できますか。」
「いいそうですよ。」
「よかった。昨日つくっておいたお弁当があるんですよ。ちょうど翠さんが準備してくれた

荷物の中に入っていたので、3人で食べましょう。」
パンダ、うさぎ、猫のチョコパンが入っている弁当箱を2人に見せた。
「まあ可愛い。ありがたくいただきます。」
「まぁ…もらってあげてもいいの。」
翠さんは猫、フレンちゃんはうさぎのパンを食べた。
「とてもおいしいですね。帰ったら作り方を教えてください。」
「分かりました!!」

8話

「つきましたの。」
「すっすごい」
池袋にはきれいな建物がたくさんならんでいた。
「こっちです。」
翠さんは建物と建物の間を通ってゆく。さっきの景色とは一変、うすぐらい所にきた。
せまい道を通っていくと、かべや地面につく赤黒いものの面積がふえていった。
「うわぁ。」

「こんなことこの会社に入れば日常なの。」
「そっそうなんですか…
「やあやあこんにちは。」
「やっほぉ～一人見ない子だねん。」
「誰ですか？」
「一人目が敵幹部の絵川（えがわ）　描太郎（びょうたろう）。キャンバスに描いた絵を実現させることができるの。ちなみに血でかくの。」
「うわぁ…」
「うわぁとはなんだ!!」
「まぁまぁ。ぼくはねぇ…寝夢（しんむ）　ネル。２秒でねることができるのだよ!!」
「そっそんだけ？今まですごい人達しか見てこなかったから少し…」
「失礼な!!言っておくが自分だけではない。ねている間に夢を見せて、夢と現実をまぜることもできるのだよ!!こんなふうに…ねっ!!」
「うっ!!」　バタッ
「紅葉!?」

「ぼく達をなめるのが悪いのだよ。」
「ぅぅ。何で、私悪くない。」
「紅葉？」
「なんであなた達までそんなことを言うんですか？」
「紅葉。大丈夫なの。」
「あんな希望を見せておいて…ユルサナイ。」
「目をさまして!!ぅっつっ強いです!!」
「大丈夫。あたいの能力を使って夢をなかったことに…」
「お前の兄弟にきいた。対策してある。」
今も紅葉は私達に攻撃をしつづけている。
「どうすれば…」
「ふふ。この間にぼくは絵をかいていようじゃないか!!」
「させない!!血は水より弱いのです!!」
「なっ!!」
「ネル君!!」
「分かった。」

紅葉は自分に攻撃をし始めた。
「やめて!!」
「ふふっいいねえ。君達はいくつもの失敗をしている。人選、相手、場所をまちがえた。今日はこのくらいで充分だ。」
二人はきえた。紅葉もうごかなくなった。
「今なら…できたの!!」
紅葉の今の記憶と体のきずを消した。
「もうそろそろですね。」

9話

「会議を始める。異論はないか？」
「それだともう一つの会議が始まります首領(ボス)。」
「そうか。なら始める。ネル君、描太郎君よくやった。」
「「ありがとうございます。」」
「そこで、グラジオラス社へ襲撃作戦をたてようと思う。」
「社を　やき払いますか？」

「全員の舌とアキレス腱を切ってやりますか。」
「なんでそんなのしかでてこないの!?そりゃあ戦うしかないんじゃ？」
「あぁ、ネル君の言う通りだ。ロベリア社幹部、に各位置についてもらう。ネルの2秒でねむらせる能力と描太郎の描いた物を物にできる能力なら駅に、狂歌(きょうか)の歌で人を狂るわせる能力と統をあつかう乱太(らんた)は図書館へ、剣をあつかう紅桜(べくら)と爆弾をつかう爆音(ばくと)は本部へ、最後に、情報をすぐにまとめられる、サルビアと幽霊化できる幽花(ゆうか)はアジトで相手の様子を無線で連絡してくれ。」
「「わかりました。」」
みんなは準備を始めた。
「サルビア!!」
「はい、なんでしょう。」
「グラジオラスへ例の手紙を。」
「承知しました。」

10話

「社長!!おはようございます。」

「紅葉か。おはよう。」
「会社に手紙がとどいておりまして。」
「ありがとう。」

親愛なるクレジオラス社へ
蝉、とかけまして、クレジオラス社、ときます。その心はどちらも、一週間ももたないでしょう。

ロベリア社

「えっそれって…」
「みんなをよんでこい。」
「はい!!」

「やっほ〜!!フレンちゃーん♡アイス買ったんだけどぉ〜食べるぅ?」
「だまれ、ちかづくな。食べん。」
「いっつもおこってばっかだからぁ、いつまでも身長が低いまんまなんだよぉ〜?」
「許さん。取りけせ。取りけさぬのならばあたいがお主の存在もろともなかったことにして

やろう。」
「おぉ!!こわい、こわい。」
バッ
いきおいよくとびらがあいた。
「ゼエッゼエッみなっさん、社…長室にあつまっ…てくだ、さい。」
紅葉がいきおいよくたおれた。それもそうだ。社長室から本部まででも遠いのに図書館でさらにまようのだ。
「ぼくが紅葉をはこぶよぉ。急いでいこぉ。」
「お主…あとでおぼえておけ。」

「お待たせしました。」
「いやよい。この手紙をみてくれ。」

「これって…。」
「そう。宣戦布告だ。駅に紅葉、菫がむかえ。」
「「わかりました。」」

「図書館には文と紫苑が行ってくれ。」
「はい。」
「最後に本部を担当してもらうのはフレン、琥珀、月桂だ。」
「はぁ？社長!!いくらなんでもクソフレン／琥珀と一緒にしないでください!!」
「アタシの作戦に何か問題が？」
「い、いいえ…」
「ねぇー俺もいるからね!!」
「・・・」
「無視!?」
「すみません…社長はどちらへ…？」
「ロベリア社の本部だよ。どうせ本部にはあちらのボスをふくめ三人くらいしかいない。アタシさえいればどうってことない。」
「…そうですか。くわしいんですね。」
「昔からのつきあいだからねぇ。」

11話

「作戦決行は明日だ。早くねて、万全の状態でいどみ、怪我人、死人は出さないように。」
「了解です!!」
コッケコッコォォォォ
「ハッ朝!!荷物OK服装OK力OK!!よし行こう。」
「おはようございます。朝から元気なのはよいことですが持ちすぎ。へらしてください。」
「菫さん!?おはようございます。すみません。」
「それでは駅まで行きましょう。」
「はい!!」

「おっ久さー♡ネルだよん!!」
「絵川だ。」
「すみません…誰ですか？（フレンに記おくけされた）」
「おのれ…我らにむかって…。」
「まあいい。私たちで一生忘れなくしてしまおう。」
「させない！ウォーターエアブラスト！」
空気中の水が一点にあつまり、ネルを一瞬にしてたおした。

「こんなにも弱いのですか。」
「ネル⁉許さん、お前等も絵にしてやろう。ブラッドキャンバス‼」
「ヴッ」
「紅葉‼ウォーターショット‼…出ない⁉」
「お前の能力ははあくしたこいつは能力すらないようだな…」
「きっき…奇跡‼」
描太郎の背後から黒いかげ。かげが描太郎をたおした。
「やった‼たおした。」
「図書館もだ。」
「本部もよ‼」
「やった‼あとは社長…」

12話

「首領‼全絶です‼」
「なに⁉そんなはずでは…」はっ‼
「私を忘れられちゃこまる。」

「首…領…ガハッ」
「幽花!!サルビア!!」
「弱いなぁ…あとはお前だけだぞ。布織(ぬおり)。」
「お前…お前だけじゃ俺をたおせない。ゆけ!!無月。阿藍。」
「んなっ!?」
でてきたのは紅葉の父と母だった。
「社長!!」
社員全員がいきおいよくとびらをあけた。
「紅葉…このままだとお前の父と母はたすからん。だが、いらいをしてくれ。いらいをうけるといつもよりも…おねがいだ。」
「代償は？」
「「紅葉の笑顔だ。」」
全員が言った。
「…父と母を助けてください!!」
「了解!!」
全員がまとまり、父と母を通して首領に手をむけ、さけんだ。

「セブン・サンダーストーム・ストライク！」
そのしゅんかん
雷がロベリア社の首領を打ちぬいた。
「ぅぐ、〝あがっ…」
「紅葉‼」
「奇跡！」
紅葉の父と母は奇跡によって一命ととりとめた。
バタバタッ
全員が同時にたおれた。
「どっどうしたんですか？」
「言っていなかったな。社員からいらいをうる、そのいらいで2人以上の命をすくうことによって力は通常の10倍となるが、力をつかった者は良くて後遺症が残るほどの重体、悪くて死だ。」
「どうして…いってくれなかったのですか？」
「弱点を教えるわけがないだろう。社長であるアタシがいなくなればこの会社はおわる。この会社が…お前は好きか？」

「っ!!はいっ好きです。私は…どうすれば？」
「ならば社長をついでくれるか？」

13話

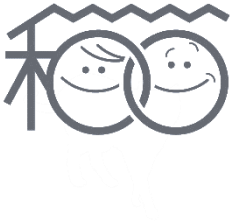
「私はグラジオラス社の社長、緑川　紅葉。これからよろしく。」
「私は栗本(くりもと)です。ここに本はありますか？」
「私は水木(みずき)　空(そら)です。秘書にしてください!!」
「ぼくはぁ心(こころ)　虎丸(とらまる)ですぅ。よろしくおねがいしますぅ。」
「あたいはアリス・カインド。よろしくおねがいしますわ。」

みらくる×ぷれしゃすメモリーズ　～大切(たいせつ)な思(おも)い出(で)～

2024 年 10 月 26 日　発行

著者　山林檎(やまりんご)

令和 6 年度 函南町立図書館 8 月～11 月ＹＡ展示・企画冊子
編集・製本・発行　函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）
　電話番号　055-979-8700
　住所　419-0122　静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。
（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の
第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。
作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使える
ものとします（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。
ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。
また、すべての文章は原文のままとし、当館で校正・校閲作業は行っておりません。

両親を失い、白い髪に紅い目という特徴から虐げられていた少女がいた。彼女は町を仕切る会社の社長に拾われ、仲間たちから新たな名前を与えられる。個性豊かな登場人物たちが大活躍する、アクション・ファンタジー！